

東京外国語大学大学院
ドイツ語学文学研究会
DER KEIM Nr. 42 抜刷
2019年3月発行
ISSN 0285-953X

ドイツ語における名詞化複合語の
項の解釈について
－項の意味論的階層関係と階層外項－

**Zur Argumentinterpretation der deutschen Nominalisierungskomposita
— Semantische Argumenthierarchie und außerhierarchisches Argument —**

小林 大志

Taishi KOBAYASHI

DER KEIM

かいむ
第42号

ドイツ語における名詞化複合語の 項の解釈について

— 項の意味論的階層関係と階層外項 —

Zur Argumentinterpretation der deutschen Nominalisierungskomposita
— Semantische Argumenthierarchie und außerhierarchisches Argument —

小林 大志

東京外国語大学大学院博士後期課程

Taishi KOBAYASHI

Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

Abstract

Der vorliegende Beitrag befasst sich mit N+N-Komposita aus der deverbalen Ereignisnominalisierung und deren Argument wie *Kanzlerernennung* ‚Kanzler ernennen‘ usw. Auf die Frage, welche Argumentinterpretation solche Komposita haben können, hat bereits Rapp (2001) mit einer Analyse des indirekt-kausativen W-Verben-Subjekts wie *Alkohol* in *Alkohol gefährdet die Jugend* als außerhierarchischer Stimulus festgestellt, dass ein N1 einem semantisch hierarchieniedrigeren Argument entspricht als der Genitiv, wobei ein Stimulus-N1 Genitivinterpretationen nicht beeinträchtigt. So wird *Bürgermeisterabsetzung des Stadtrats* als ‚Der Stadtrat setzt den Bürgermeister ab‘ (nicht: ‚Der Bürgermeister setzt den Stadtrat ab‘), *Alkoholgefährdung der Jugend* als ‚Alkohol gefährdet die Jugend‘ gedeutet. Allerdings enthält Rapps Annahme zwei Forschungsdesiderate: 1) Ungeklärter Mechanismus zur Nominativzuweisung zum Stimulus; 2) Die Argumentinterpretation der Nominalisierungskomposita aus Applikativverben wie *Containerbeladung des Schiffes* ‚das Schiff mit Containern beladen‘ als (scheinbarer) Gegenbeleg.

Im typen-baumgraphisch gesteuerten System von Wunderlich (1992, 1997ab, 2000) steht dem Stimulus wegen seiner Tiefenbettung im Anlassvorgang in der kausativen semantischen Form keine hierarchiebasierte Kasuszuweisung zur Verfügung. Bei diesbezüglicher Nominativzuweisung geht es, wie am impliziten Agens sowie am fehlenden Stimulus-Genitiv bei der Nominalisierung ersichtlich, um eine sekundäre Kasuszuweisung im Sinne von Kobayashi (2017). Applikativverben lassen sich wie W-Verben als Verben mit einem außerhierarchischen Argument beweisen.

1. はじめに

本稿はドイツ語における (1) のような、N+N 型の複合語を扱う。(1) の複合語は主要部 (以降 N2) が動詞の事象名詞化で、¹ 従属部 (以降 N1) が N2 の基盤動詞の項に対応する。(1) では、N1 と N2 の関係が、それぞれ右列に示す動詞句の項と動詞の関係に対応している。このような語構成の複合語を本稿では「名詞化複合語」と呼び、誤解の余地がない場合には単に「複合語」とも呼ぶ。

- | | |
|-------------------------|---------------------------------|
| (1) a. Kanzlerernennung | ,Kanzler ernennen‘ 「首相を指名する」 |
| b. Umweltverschmutzung | ,Umwelt verschmutzen‘ 「環境を汚染する」 |
| c. Wetterbeobachtung | ,Wetter beobachten‘ 「気象を観測する」 |
| d. Bibelübersetzung | ,Bibel übersetzen‘ 「聖書を翻訳する」 |

本稿では、ドイツ語における名詞化複合語が項に関してどのような解釈を持ち得るかという問題提起のもと、これらの複合語の項の解釈が、統語論的な規則によってではなく、階層関係にもとづく意味論的規則によって条件づけられていることを示す。

本稿は 5 節からなる。2 節では、出来事を表す名詞化複合語に関する先行研究である Rivet (1999) と Rapp (2001) の観察と一般化を紹介する。3 節では、Rapp (2001) の枠組みが抱える問題点を指摘する。4 節では、3 節で指摘した問題点について、意味論的階層関係から独立のものとして振る舞う「階層外項」という範疇を導入して解決を図る。最後に 5 節で本稿の議論をまとめる。

2. 先行研究：Rivet (1999) と Rapp (2001)

複合語における N1 の解釈については過去、*Bibelübersetzer* 「聖書翻訳者」のように *-er* 接尾辞により派生する動作主名詞化を N2 とするものを中心に論じられることが多かった (cf. Fanselow 1988ab)。そうした中で、出来事を表す複合語の例を中心的に扱っている研究が Rivet (1999) と Rapp (2001) である。本節ではこの 2 論文における観察と一般化を紹介する。

2.1. Rivet (1999) : Rektionskomposita und Inkorporationstheorie

Rivet (1999) は生成文法の枠組みで、名詞化複合語が動詞と補語からなる動詞

¹ 本稿では「名詞化」という述語を、動詞から名詞を派生するプロセスの意味でも、派生された名詞の意味でも用いる。

句を基盤として統語論的な派生によって形成されるという分析を行っている。名詞化複合語を統語論によって分析する根拠として、Rivet は、N1 の解釈が動詞における項の統語的な地位により制約されるという観察を行っている。

Rivet (1999: 308, 316) は、N1 が動詞における対格目的語に限定されるとする。(2a–c) は、この一般化の根拠として Rivet (1999: 308) が提示している例である。(2a) は主語、(2b) は与格目的語、(2c) は前置詞句の項が N1 とならないことを示そうとする例である。容認性の判断は Rivet (1999) による。²

(2) a. *Bürgermeistereröffnung (der Ausstellung)

,Der Bürgermeister eröffnet die Ausstellung‘ 「市長が展覧会を開催する」

b. *Enkelübergabung (des Hauses)

,dem Enkel das Haus übereignen‘ 「孫に家を贈与する」

c. *Drogendurchsuchung (des Gepäcks)

,das Gepäck nach Drogen durchsuchen‘ 「薬物がないか荷物を検索する」

しかし、Rivet (1999) の主張は首肯できない。というのも、N1 が動詞における対格目的語に限定されるという観察は誤りであるからである。主語や与格目的語や前置詞句の項を N1 とする複合語は、いくらでも実例が存在する。例えば、主語 (,Der Arzt behandelt den Präsidenten‘)、与格目的語 (,dem Vertrag zustimmen‘)、前置詞句の項 (,das Getriebe mit Öl versorgen‘) を N1 とする複合語として、(3) のような実例が挙げられる。³

(3) a. Der Rentner R. konnte sich wegen starker, auf **eine fehlerhafte Arztbehandlung** zurückzuführender Rückenschmerzen zwei Wochen nicht selbst versorgen. (DWDS: Der Tagesspiegel, 17.08.2000) 年金生活を送る R さんは、医師の誤った処置が原因の強い背の痛みのために、2週間にわたり身の回りのことを自分で行うことが

² Rivet (1999) はこの例における括弧の意味を明らかにしていない。仮に Rivet (1999) の容認性判断が括弧内の成分を含む表現について行われていた場合、この成分が容認度の低下を招いている可能性がある。

³ 以降本稿で挙げるコーパスの用例における強調・省略・補充は全て筆者による。なお、本稿で典拠としたコーパスは次の2つである：

・DWDS: Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache; cf. <http://www.dwds.de>

・DeReKo: Das deutsche Referenzkorpus; cf. <http://www.ids-mannheim.de/kl/projekte/korpora/>

できなかった

- b. daß eine vorgezogene Autonomiedebatte im Jerusalemer Parlament **die Vertragszustimmung** gefährden würde. (DWDS: Die Zeit, 30.03.1979) エルサレムの議会における自治を巡る議論の前倒しが、(和平) 協定の承認を脅かしかねないこと
- c. Durch eine Fehlkonstruktion kann **die Ölversorgung des Getriebes** unterbrochen werden. (DWDS: Berliner Zeitung, 17.03.1999) 組み立てを誤ればその装置への石油供給が中断されることがある

したがって、N1が動詞の対格目的語に限られるという一般化は成り立たない。

2.2. Rapp (2001) : Argumentstruktur und Erstgliedinterpretation bei deverbalen Derivaten — ein semantikbasierter Ansatz

Rapp (2001) は、名詞化複合語が統語論的に派生されるのではなく、統語論から独立した語彙の体系において形成されるとする研究である。Rapp (2001) は、N1の解釈には、好まれる解釈の傾向はあるものの、基盤動詞のどの項としての解釈も原則的に可能であるとする。さらに、名詞化複合語が属格項を伴う場合について、属格項が常に N1 よりも意味論的階層関係における上位の項として解釈されるとする。

(4) は、N1 が原則としてどの項としても解釈可能であることを示す Rapp (2001: 263) の例の一部である。(4) において、N2 の基盤動詞は、統語的にはどれも主語と対格目的語をとる他動詞 (cf. *Der Zeuge beschreibt den Täter* 「目撃者が犯人を記述する」; *Der Architekt renoviert das Haus* 「建築家が家を改装する」; *Das Publikum bewundert den Schauspieler* 「観客が俳優に感嘆する」) で、意味的には *beschreiben* が行為動詞、*renovieren* が使役の状態変化動詞、*begeistern* が心理状態動詞である。N1 は、左列では主語に、右列では目的語に対応する。Rapp (2001) の判断によれば、N1 が目的語に対応する右列の複合語がより普通ではあるものの、主語を N1 とする左列の複合語も特に問題はないとのことである。

- (4) a. Zeugenbeschreibung / Täterbeschreibung
lit. 「目撃者記述」 lit. 「犯人記述」
- b. Architektenrenovierung / Hausrenovierung
lit. 「建築家改装」 lit. 「家改装」

- c. Publikumsbewunderung / Schauspielerbewunderung
lit. 「観客感嘆」 lit. 「俳優感嘆」

名詞化複合語が属格項を持つ場合について、Rapp (2001) は、属格項が名詞化の項構造によって媒介された項であると仮定した上で、N1 の解釈に応じて名詞化の項構造が (5) の規則により修正され、属格項の解釈が制約されるとする。

- (5) 複合語項構造規則 (Rapp 2001: 273)
- a. N1に対応する項は項構造から削除される。
 - b. (5a) により削除された項よりも意味論的階層関係において上位の項は、項構造に残り、削除された項のあとを継ぐ。
 - c. (5a) により削除された項よりも意味論的階層関係において下位の項は、属格による実現が制約される。

項の意味論的階層関係は、動詞の語彙的意味形式を「行為」を表す DO, 「変化」を表す BECOME などの要素的意味を持つ基本関数の組み合わせにより分析された意味形式の構造によって定まる。関数 $\phi(\sigma, \tau)$ において、第 1 項 σ は第 2 項 τ より上位である。 σ が τ よりも上位であることを右向き不等号を用いて $\sigma > \tau$ と表す。基本関数は項の意味役割も規定する。行為動詞、状態動詞、心理状態動詞の意味形式は (6b) – (8b) のように分析され、それぞれ (6c) – (8c) の意味役割と階層関係の項を持つ。使役の状態変化動詞の意味形式は複数の関数からなる複合的な意味形式として (9b) のように分析され、項の意味役割と階層関係は (9c) のようになる。

- (6) a. 行為動詞: e.g. *verfolgen* 「迫害する」, *musizieren* 「演奏する」 etc.
b. DO (Agens, Patiens) または DO (Agens)
c. Agens > Patiens
- (7) a. 状態動詞: e.g. *klug sein* 「賢い」, *krank sein* 「病気だ」 etc.
b. BE (Theme)
c. Theme

- (8) a. 心理動詞状態:⁴ e.g. *bewundern* 「感嘆する」, *verehren* 「崇拜する」 etc.
 b. POSS (Experiencer, Estimatum)
 c. Experiencer > Estimatum
- (9) a. 使役の状態変化動詞:⁵ e.g. *absetzen* 「罷免する」, *renovieren* 「改装する」 etc.
 b. CAUSE (DO (Agens), BECOME (BE (Theme)))
 c. Agens > Theme

(5) の規則により, N1 よりも下位の項は属格による実現が制約され, 属格項を伴う名詞化複合語では, 常に属格項が N1 よりも上位の項に対応する。

- (10) a. die Syrerverfolgung der Römer (Rapp 2001: 272)
 = ‚Die Römer verfolgen die Syrer‘ 「ローマ人がシリア人を迫害する」
 ≠ ‚Die Syrer verfolgen die Römer‘ 「シリア人がローマ人を迫害する」
- b. die Bürgermeisterabsetzung des Stadtrats (Rapp 2001: 272)
 = ‚Der Stadtrat setzt den Bürgermeister ab‘ 「市議会が市長を罷免する」
 ≠ ‚Der Bürgermeister setzt den Stadtrat ab‘ 「市長が市議会を解散する」
- c. die Frauenbewunderung der Griechen (Rapp 2001: 272)
 = ‚Die Griechen bewundern die Frauen‘ 「ギリシャ人が女性を賛美する」
 ≠ ‚Die Frauen bewundern die Griechen‘ 「女性がギリシャ人を賛美する」

(5) の規則には一見, *gefährden* 「危険に曝す」や *begeistern* 「熱狂させる」の名詞化複合語が反例となるように思われる。文における意味と形式の関係を意味形式の構造的分析によってとらえる研究では, 項の意味論的な階層関係が, 文における統語論的な関係と写像的に対応すると考えられている (cf. 藤縄 2010: 7)。すなわち, 意味論の階層性における上位の項は統語的にも高い位置 (例えば主語) に, 意味論の階層性における下位の項は統語的にも低い位置 (例えば対格目的語) に現れる。

⁴ POSS は物的所有関係の分析にも用いられ, POSS の第 2 項は Possessum とも呼ばれる。本稿は物的所有を表す動詞を扱わないので, POSS の第 2 項を Estimatum と呼ぶ。

⁵ Rapp (2001) は Wunderlich (1997a) と Ehrich&Rapp (2000) に従い使役関係を表すのに CAUSE 関数を用いない分析を行っているが, ここではより一般的な CAUSE を用いた分析を採用する。

- (11) a. *absetzen*: Der Bürgermeister setzt den Stadtrat ab.
 Agens > Theme
 NOM > AKK
- b. *bewundern*: Die Griechen bewundern die Frauen.
 Experiencer > Estimatum
 NOM > AKK

ゆえに、(12) のような文を形成する *gefährden* や *begeistern* では、Alkohol > die Jugend, der Film > die Kinder という階層関係が示唆される。

- (12) a. Alkohol gefährdet die Jugend. アルコールが若者を脅かす
 b. Der Film begeistert die Kinder. 映画が子供を熱狂させる

仮にこのような階層関係があれば、(5) の規則はこれらの動詞の名詞化複合語に、N1 が目的語、属格項が主語に対応する解釈を予見する。ところが実際には、(13) のように、N1 が主語、属格項が目的語に対応し、反対に、目的語を N1、主語を属格項とする (14) のような表現はできないのである。

- (13) a. die Alkoholgefährdung der Jugend
 = ‚Alkohol gefährdet die Jugend‘ アルコールが若者を脅かす
 b. die Filmbegeisterung der Kinder
 = ‚Der Film begeistert die Kinder‘ 映画が子供を熱狂させる
- (14) a. *die Jugendgefährdung des Alkohols
 b. *die Kinderbegeisterung des Films

Rapp (2001) は *gefährden* や *begeistern* のような動詞を作用動詞 (W-Verben) と呼んでいる。作用動詞は *gefährden*, *begeistern* の他、*strapazieren* 「痛める」、*erheitern* 「元気づける」などからなる使役的意味をもった他動詞のクラスで、心理状態の惹起を表す心理的作用動詞 (e.g. *erheitern*; cf. (16)) と、その他の状態の惹起を表す非心理的作用動詞 (e.g. *gefährden*; cf. (15)) に分けられる。作用動詞の特徴は、(15a)/(16a) の命令文の解釈からわかるように、結果状態の惹起が間接的であるという点である。また、使役的な意味を持ちながら相的には、atelic であるという点も特徴的で

ある (cf. (15b)/(16b))。

- (15) a. Gefährde deine Mitschüler nicht! 学友を危険にさらすな (=学友を危険にさらすことになるようなことをするな)
 b. Der Geisterfahrer gefährdete den Verkehr *in 10 Minuten/10 Minuten lang. 逆走ドライバーが *10分で/10分間 交通を脅かした
- (16) a. Erheitere ihn! 彼を元気づけよ (=彼を元気づけるようなことをせよ)
 b. Der Clown begeisterte die Kinder *in drei Stunden/drei Stunden lang. ピエロが子供たちを *3時間で/3時間の間 熱狂させた

作用動詞では、Agens 的な項の他、原因事象を表す出来事名詞や、原因事象に関わる様々な項が主語となり得る (cf. (17a)/(18a))。Rapp (2001) は作用動詞の主語を Stimulus 「刺激」と呼んでいる。Rapp (2001) は Agens 的な項を含め、作用動詞の主語をすべて Stimulus と呼んでいるが、Agens 的な項が主語となる場合には可能な (17b)/(18b) のような mit 句による原因事象・原因事象に関する項の表示が、(17c)/(18c) のように、原因事象・原因事象に関する項を主語とする場合にはできなくなることから、ここでは Agens と他の主語を区別し、Agens 以外のものを Stimulus と呼ぶことにする。

- (17) a. Er/Häufiges Waschen/Das neue Shampoo strapazierte die Haare.
 彼/繰り返し洗うこと/新しいシャンプーが髪を痛めた
 b. Er strapazierte die Haare mit häufigem Waschen/mit dem neuen Shampoo. 彼は繰り返し洗うことで/新しいシャンプーで髪を痛めた
 c. *Waschen strapaziert die Haare mit dem neuen Shampoo/*Das Shampoo strapaziert die Haare mit häufigem Waschen.
- (18) a. Er/Musizieren/Die Sonate erheiterte mich.
 彼/音楽の演奏/奏鳴曲が私を元気づけた
 b. Er erheiterte mich mit dem Musizieren/mit der Sonate.
 彼は音楽の演奏で/奏鳴曲で私を元気づけた
 c. *Musizieren erheitert mich mit der Sonate/*Die Sonate erheitert mich mit dem Musizieren.

Rapp (2001) は作用動詞の意味形式を (19) のように分析している。(19) において、P (…z…) は z (= Stimulus) に関する任意の述語で、z に応じて様々に解釈される。この述語は因果関係を表す CAUSE によって状態述語 BE ないし POSS と関係づけられている。従来の研究では、CAUSE を行為 DO と変化 BECOME の関係とするのが一般的であるが、Rapp (2001) は任意の述語 P と状態 BE/POSS を関係づける柔軟な因果関係を認めることで、間接的惹起という作用動詞の特徴をとらえている。心理的作用動詞では、z が原因事象の項であると同時に POSS の項ともなっており、これによって Stimulus が心理状態の対象 (Estimatum) でもあることが示されている。

- (19) a. *gefährden*: CAUSE (P (…z…), BE (y))
 b. *erbeitern*: CAUSE (P (…z…), POSS (y, z))

属格項を伴う作用動詞の名詞化複合語において、先の (13) のように N1 が主語、属格項が目的語に対応する事実を、Rapp (2001: 245, 271) は、「Stimulus が項の意味論的階層関係から独立である」と想定することで説明を試みている。すなわち、階層関係から独立した Stimulus は他の項に対して上位にも下位にも位置づけられず、N1 が Stimulus に対応しても、属格項の解釈を階層関係によって制約しないのである。

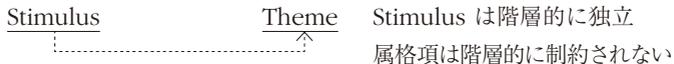
- (20) a. 状態変化動詞

die **Bürgermeisterabsetzung des Stadtrats**



- b. 作用動詞

die **Alkoholgefährdung der Jugend**



他方、N1 が目的語、属格項が主語に対応する解釈がなされないという事実は、作用動詞の非複合的な名詞化においても Stimulus は属格項とならないという事実と関係づけられる。

- (21) a. die Gefährdung der Jugend_{Theme}/*des Alkohols_{Stimulus}
 b. die Begeisterung der Kinder_{Experiencer}/*des Films_{Stimulus}

- (23) a. *fear*: Bill fears ghosts.
 Experiencer Subject Matter
 b. *frighten*: Ghosts frighten Bill.
 Causer Experiencer

Pesetsky (1995) では、2つの心理動詞クラスの構文的差異が、(24)の意味論的階層関係を想定することによって説明される。つまり、Experiencer は意味論的に Causer よりも下位、Subject Matter よりも上位に位置づけられ、それゆえ Causer には Experiencer よりも上位の形式が与えられ、Subject Matter には Experiencer より下位の形式が与えられるという説明である。

- (24) Causer > Experiencer > Subject Matter (Pesetsky 1995: 59)

しかし、Stimulus が意味論的階層関係から独立であると考える Rapp (2001) の立場では、Pesetsky (1995) が Causer について行っているような Stimulus への主格付与を使役関係による相対的上位性に帰す説明はできない。意味論的階層関係から独立した Stimulus は、他の項に対して上位でも下位でもないはずだからである。したがって、Stimulus を階層的に独立の項とするなら、Stimulus への主格付与は項の意味論的階層関係によらないメカニズムによって説明しなくてはならないが、Rapp (2001) はそのような非階層的メカニズムを明らかにしていない。

むしろ、Rapp (2001) が作用動詞に想定する意味形式は、Stimulus (= z) を y よりも左に配置することで、 $z > y$ という階層関係を示唆するものになっている。z への主格付与が非階層的に動機づけられていない以上、この分析は $z > y$ という階層性を想定しているのと変わらないことになる。

- (25) a. *gefährden*: CAUSE (P (…z…), BE (y)) (= (19))
 b. *erbeitern*: CAUSE (P (…z…), POSS (y, z))

Rapp (2001) は、一方では Stimulus を階層関係から独立の項としておきながら、他方ではこれを使役関係における事実上の上位項として扱っているのである。

3.2. 適用動詞の名詞化複合語における一見した反例

Rapp (2001) が抱えるもう一つの問題は、適用動詞 (Applikativverben) の名

詞化複合語にみられる一見した反例である。適用動詞とは、位置変化を表す複合動詞からなる動詞クラスで、対応する単純動詞が前置詞句で表す場所の項が対格目的語に対応するものである。例えば、*beladen*「積む」や *bemalen*「塗る」、*umwickeln*「巻く」などが適用動詞である。

(26) 適用動詞

- a. Sie beluden das Schiff mit Gütern.
cf. *Sie luden Güter auf das Schiff.*
彼らは船に荷物を積んだ
- b. Er bemalte die Wand mit Farbe.
cf. *Er malte Farbe an die Wand.*
彼は壁にペンキを塗った
- c. Er umwickelte den Draht mit Isolierband.
cf. *Er wickelte Isolierband um den Draht.*
彼は針金に絶縁テープを巻いた

Rapp (2001) は適用動詞のような位置変化の動詞について積極的には考察していないものの、位置変化に含まれる「所在」という関係については、Rapp (1997), Ehrich & Rapp (2000) を踏襲し、APPL という基本関数により所在者・所在物 (Lokatum)⁶ と場所を規定する個体 (Relatum) の関係にとらえている。(26) では、*Güter, Farbe, Isolierband* が Lokatum, *Schiff, Wand, Draht* が Relatum である。

(27) APPL (Lokatum, Relatum) Lokatum > Relatum

この階層関係にしたがうと、属格項が N1 よりも意味論的に上位の項として解釈されるという (5) の規則 ((28) に再掲) は、位置変化を表す動詞の属格項を伴う名詞化複合語に、N1 が Relatum, 属格項が Lokatum に対応する解釈を予見する。

(28) 複合語項構造規則 (= (5))

- a. N1 に対応する項は項構造から削除される。

⁶ Rapp (2001) の用語では Applikatum。

- b. (5a = (28a)) により削除された項よりも意味論的階層関係において上位の項は、項構造に残り、削除された項のあとを継ぐ。
- c. (5a = (28b)) により削除された項よりも意味論的階層関係において下位の項は、属格による実現が制約される。

この予見は、位置変化を表す適用動詞以外の多くの動詞において妥当である。例えば、*verladen* などの Lokatum を対格で表現する動詞クラス（使役移動動詞）の名詞化複合語では、(30) の実例のように、N1 (*Schiff-*) が Relatum, 属格項 (*der Produkte*) が Lokatum として解釈される。

(29) 使役移動動詞

Sie verladen Produkte auf das Schiff.

Agens Lokatum Relatum

彼らは船に製品を積み込んだ

- (30) Wasserkraft zum Betrieb von Hammerwerken und Maschinen sowie der Tiefwasserhafen **zur Schiffsverladung der Produkte** in Fiskars waren Standortvorteile, (DeReKo: Wikipedia, 2011) 粉碎機と機械を稼働するための水力とフィスカースの製品を船に積み込むための水深のある港は立地上の利点だった

ところが、適用動詞の名詞化複合語では、Lokatum が N1 (*Container-*; *Moos-*), Relatum が属格項 (*deren* (= ‚Schiffsriesen‘); *des Brunnens*) に対応する。

- (31) a. [Das Schiff schaukelt] uns vorbei an 586 Kränen, 86 Kilometern Kaimauer und Schiffsriesen, **deren Container-Beladung** heutzutage nur noch ein Mann erledigt. (DeReKo: Oberösterreichische Nachrichten, 12.04.1997) 船が、586 基のクレーン、86 キロメートルの岸壁、そしてコンテナの積み込みを今日では男が一人で行っている大型船のかたわらを通して私たちを運ぶ
- b. Weitere Entwürfe [für die Neugestaltung der Brunnenanlage] favorisieren begehbare Wasserspiele oder **eine Moosbepflanzung des Brunnens**. (DeReKo: Berliner Morgenpost, 12.02.2006) 噴水の改装についての他の案は、立入可能な水盤や噴水へのコケ類の植栽を

推している

この振る舞いは、先の予見と食い違う。⁷

4. 項の意味論的階層関係と階層外項

Rapp (2001) と同様に、項の意味論的階層関係を、意味形式の構造により規定することを試みた研究である Wunderlich (1992, 1997ab, 2000) は、構造的な扱いを受け得る項、すなわち、主格・対格・与格を付与されての名詞句としての統語的実現がなされ得る項を、(32) のように規定している。

(32) 構造的扱いを受け得る項 (Wunderlich 1992, 1997ab, 2000)

[意味論的階層関係にもとづく]⁸ 構造的扱いを受け得るのは、意味形式中の個体の項のうち、最下位の項、および最下位の項をすべての実現において L 統御する項である

L 統御 (L-command) とは、タイプ論にもとづくツリー表示 (cf. Lohnstein 1996: 112–131) を用いて (33) のように定義される関係である。

(33) L 統御 (Wunderlich 2000:252, 藤縄 2010:7)

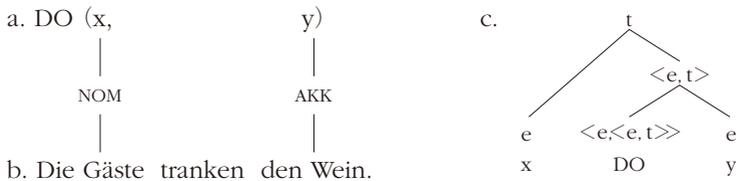
タイプ論にもとづくツリー表示において、節点 α のひとつ上の節点 γ 、または γ と同じタイプの連鎖で繋がるさらに上の節点の配下に β があれば、 α は β を L 統御する

例えば、(34) の例では、(34c) のツリー表示において、最下位の個体項は y であり、 y は x のひとつ上の節点 t の配下にあることから、 x が y を L 統御する。ゆえに x と y が構造的扱いを受け、 x に主格が、 y に対格が付与される。

⁷ 適用動詞を巡っては、位置変化ではなく状態変化の動詞として分析する Rappaport & Levin (1988) などの立場もある。そのような立場の問題点については、Wunderlich (1992) および Brinkmann (1997) を参照されたい。

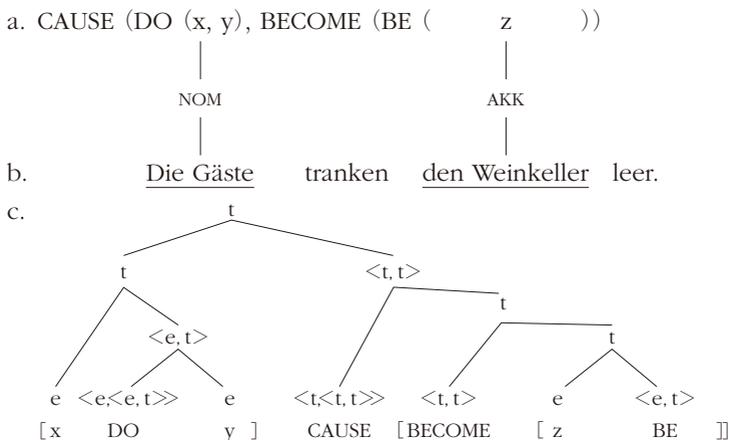
⁸ Wunderlich (1992, 1997ab, 2000) は動詞の意味形式と項構造の関係について、意味論的階層にもとづく理論化を試みた研究なので、そこで論じられている規則は、当然「意味論的階層関係にもとづく」操作の規則である。

(34) *trinken*



他方, (35) では, 最下位の個体項は z であるが, (35c) のツリー表示において z は節点 x のひとつ上の節点 t のさらにもうひとつ上の節点 t の配下にあるため, x は z を L 統御するものの, y については, そのひとつ上の節点 <e, t> の配下に z がなく, この節点の上の節点はタイプが異なるため, y は z を L 統御しない。すなわち, 意味論的階層関係にもとづく構造的扱いを受けるのは, 意味形式中の 3 つの個体項のうち, x と z の 2 項で, x には主格が, z には対格が与えられる。

(35) *leer trinken*



この規定を考慮に入れ, 作用動詞と適用動詞について, 改めて検討したい。

4.1. 階層外項としての Stimulus

Rapp (2001) は作用動詞の意味形式を (36) のように分析しているが, この意味形式は原因事象 P (…z…) のタイプが不明である。

- (36) a. *gefährden*: CAUSE (P (…z…), BE (y))
 b. *erheitern*: CAUSE (P (…z…), POSS (y, z))

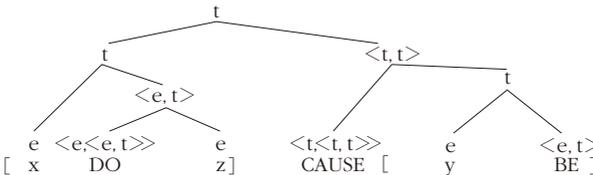
そこで、作用動詞を(37)の意味形式によって分析したい。(37)では Rapp の分析とは違い、原因事象を任意の述語ではなく、行為としている。Stimulus (= z) は CAUSE に原因事象として埋め込まれた DO の第 2 項に対応する。

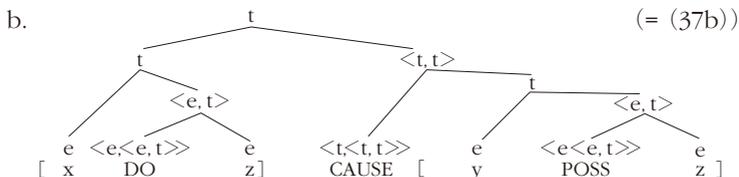
- (37) a. CAUSE (DO (x, z), BE (y))
 b. CAUSE (DO (x, z), POSS (y, z))

作用動詞の主語は Agens でもあり得ること、また Agens が主語となる場合にも、Stimulus は依然として mit 句により表示し得ることからも、作用動詞の意味形式に DO 関数を含め、Agens をその第 1 項、Stimulus を第 2 項と分析することは有効であろう。

- (38) a. Er strapazierte die Haare mit häufigem Waschen.
 Agens Theme Stimulus
 彼は繰り返し洗うことで髪を痛めた
 b. Er erheiterte mich mit dem Musizieren.
 Agens Experiencer Stimulus
 彼は音楽の演奏で私を元気づけた

(37ab) の意味形式にもとづくツリー表示は、それぞれ (39ab) である。このうち、(39b) の心理的作用動詞の意味形式では、純粋に最深部にある個体項は POSS 関数の第 2 項 z であるが、この項は、DO の第 2 項としてより浅い位置にも出現している。そのため心理的作用動詞については、浅い位置にも表れる z ではなく、z に次ぐ深い位置にある POSS 関数の第 1 項 y を最下位の個体項とみなす。

- (39) a.  (= (37a))



Stimulus, すなわち原因事象の DO 第 2 項 z に注目すると、この項は (39ab) いずれのツリー表示においても、ひとつ上の節点 $\langle e, t \rangle$ の配下に y を持たず、またその上の節点は t で、タイプが異なることから y を L 統御しない。

Rapp (2001) は、Stimulus が意味論的階層関係から独立であるとしているのであった。そこで、Stimulus の階層的独立性を、この項の意味形式における位置と関係づけ、Stimulus が (40) に定義される「階層外項」であると考えられる。

(40) 階層外項

意味形式中の項のうち、最下位の個体項でも、最下位の個体項をすべての実現において L 統御する項でもない項は階層外項である。階層外項は、項の意味論的階層関係から独立のものとして振る舞う。すなわち、意味形式中の位置にかかわらず、他の項に対して上位でも下位でもないものとみなされる。

なお、(40) における「階層関係から独立のものとして振る舞う」とは、階層的順位を欠くということではなく、階層性にもとづく操作の対象とならないということである。階層的順位は意味形式中の位置に応じて定まるので、意味形式中の項である以上、階層外項にも順位自体は想定し得る。

4.2. Stimulus への二次的主格付与

作用動詞において Stimulus は主格によって表示され得るが、Stimulus が階層外項であるとするれば、この主格付与は項の意味論的階層関係にもとづくものではないはずである。そこで筆者は、Stimulus への主格付与が、Kobayashi (2017) の主張する「二次的格付与」にあたる考える。

筆者は Kobayashi (2017) において、項と格の関係が、意味役割の階層、すなわち項の意味論的階層関係にもとづく単一のメカニズムによって決定されるのではなく、場合によりこの関係が「どの項に注目するか」という別の原理によって上書きされることで、多元的に決定されることを主張した。項の意味論

的階層関係にもとづく格付与を一次的格付与、「どの項に注目するか」という原理にもとづく格付与を二次的格付与と呼ぶ。

二次的格付与は、例えば、*schlagen*「殴る」という動詞が他者の身体部位を標的とした打撃を表す場合に見られる。この事象は、「行為者による、他者の身体部位により規定される場所への拳などの移動」として、行為者・身体部位により規定される場所・身体部位の所有者・拳などの移動体の4項からなる事象と分析し得る。⁹ このうち拳などの移動体を除く残る3項について、¹⁰ 意味役割をひとまず、行為者は Agens, 身体部位により規定される場所は Ort, 身体部位の所有者は Experiencer とし、Agens > Experiencer > Ort という階層関係を想定しよう。Ort は 3.2 節で述べた場所を規定する個体 (Relatum) ではなく、空間的実体としての「場所」である。Agens に主格, Experiencer に与格を与え、Ort は前置詞句で表示するのが意味論的階層関係にもとづく一次的格付与, Experiencer に注目し、この項に対格を与えるのが二次的格付与である。

- (41) a. Er schlug **dem Mann** ins Gesicht. … 一次的格付与
 b. Er schlug **den Mann** ins Gesicht. … 二次的格付与
 Agens Experiencer Ort
 彼は男の顔を殴った

作用動詞では、Agens に主格, Patiens/Experiencer に対格を与えるのが、一次的格付与にあたる。階層外項である Stimulus は意味論的階層関係にもとづく一次的格付与では構造的扱いを受け得ないため、主格や対格ではなく mit 句による斜格的な手段によって任意に表示される。

- (42) a. Er strapazierte die Haare **mit Waschen**. … 一次的格付与
 Agens Theme Stimulus
 b. Er erheiterte mich **mit dem Musizieren**. … 一次的格付与
 Agens Experiencer Stimulus

これに対し、Stimulus に主格を与えるのが二次的格付与である。二次的格付与は意味論的階層関係にもとづくものではないため、階層外項である Stimulus

⁹ このような分析は Jackendoff (1990: 143) にもみられる。

¹⁰ この項は *Er schlug dem Mann mit der Faust ins Gesicht* 「彼は男の顔をこぶしで殴った」のように mit 句により表示される。

詞における Experiencer への対格付与が二次的格付与であるため、(48) のように、属格項は Experiencer に対応しない。¹¹

- (47) a. die Behandlung des Arztes_{Agens}/des Patienten_{Patiens}
 cf. ‚Der Arzt behandelt den Patienten‘ 医師が患者を処置する
 b. die Prüfung des Rechnungshofs_{Agens}/der Bilanz_{Patiens}
 cf. ‚Der Rechnungshof prüft die Bilanz‘ 会計監査院が収支を確かめる
- (48) der Schlag des Mannes_{Agens}/*des Nachbarn_{Experiencer}
 cf. ‚Der Mann schlägt den Nachbarn‘ 男が隣人を殴る

この特徴は、作用動詞の名詞化にも当てはまる。作用動詞では、Stimulus が主格で表示されるにも関わらず、その名詞化では、属格項が Stimulus には対応しない。

- (49) a. die Gefährdung *des Alkohols_{Stimulus}/der Jugend_{Theme}
 cf. ‚Alkohol gefährdet die Jugend‘ アルコールが若者を脅かす
 b. die Begeisterung *des Films_{Stimulus}/der Kinder_{Experiencer}
 cf. ‚Der Film enttäuscht die Kinder‘ 映画が子供を熱狂させる

この事実は、作用動詞における Stimulus への主格付与が二次的格付与であることを裏付けるものである。

4.3. 適用動詞の階層外項

最後に、適用動詞の名詞化複合語を巡る問題について論じる。適用動詞の意味形式について、Wunderlich (1992) と Brinkmann (1997) にならい (50) のように分析する。(50) は、x の行為が誘因する y の位置変化を表している。

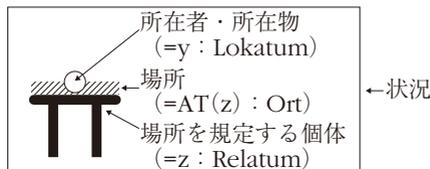
(50) CAUSE (DO (x, y), BECOME (LOC (y, AT (z))))

(50) は「所在」の関係を、Rapp (2001) の用いた APPL 関数ではなく、LOC

¹¹ Schlag などの名詞化が持つ属格項解釈の制約については、名詞化の形態論的な種別と関係づける Rapp (2006) などの立場もあるが、そのような見解について、筆者は Kobayashi (2017) において反駁している。

関数によって記述している。LOC は APPL と同じく所在を表す関数だが、APPL が所在を個体と個体 (Lokatum と Relatum) の関係と分析するのと異なり、LOC は所在を個体と場所 (Lokatum と Ort) の関係として分析する。AT (z) は「個体 z により規定される場所」を表す e タイプの項である。¹² Lokatum, Ort, Relatum の概念的な関係を (51) に図示する。

(51) Lokatum/Ort/Relatumの関係 (cf. 藤縄2016: 5)



適用動詞は複合動詞のクラスで、接頭辞 *be-* (e.g. *beladen*, *bepflanzen*) ないし他の前置詞由来の接頭辞 (e.g. *umwickeln*) を有する。適用動詞に典型的な接頭辞 *be-* について、Wunderlich (1992) と Brinkmann (1997) は、この接頭辞が通時的に現代語の前置詞 *bei* と関係することから、*be-* を方向の前置詞句と共通する (52) の意味形式により分析している。(52) の意味形式は CAUSE の結果事象として *be-* を持つ適用動詞の意味形式の一部をなし、他の前置詞由来の接頭辞を持つ適用動詞も、その接頭辞に応じた前置詞の意味形式が動詞の意味形式の一部を構成する。なお、(52) はあくまで接頭辞 *be-* の意味形式であり、現代語の前置詞 *bei* の意味とは異なることを留意されたい。

(52) *be-*: BECOME (LOC (v, BEI (v)))

cf. 方向の前置詞 *an*: BECOME (LOC (v, AN (v)))

(52) の分析は、*be-* をもつ適用動詞と対応する単純動詞のペアにおいて、適用動詞の対格目的語が単純動詞の *auf* や *an* の前置詞句と対応し、*in* の前置詞句とは周位的にしか対応しないことから支持される。

(53) a. Sie luden Heu auf den Wagen.

¹² AT だけを抜き出せば、AT は $\langle e, e \rangle$ タイプである。z により規定される場所には「z の下・周り」など様々な可能性があり、UNTER (z) や UM (z) のように明示的にも表現し得るが、ここでは AT (z) で代表する。*be-* を持つ適用動詞では、AT (z) は BEI (z) となる。

b. Sie beluden den Wagen mit Heu.

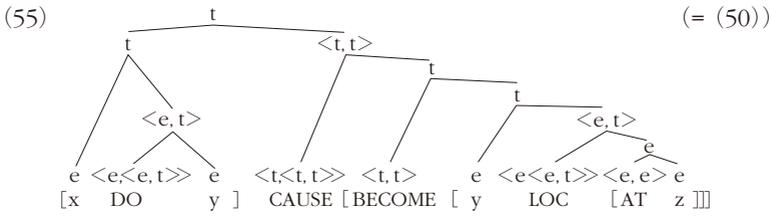
彼らは干し草を車に積んだ

(54) a. Sie luden Gepäck in den Kofferraum.

彼らは荷物を荷室に積み込んだ

b. ?Sie beluden den Kofferraum mit Gepäck. (Wunderlich 1992: 29)

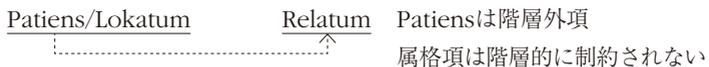
(50) の意味形式のツリー表示は (55) である。LOC の第 2 項 Ort (= AT (z)) は場所の項であって個体の項ではないが、適用動詞は AT までも意味形式中に含むため、AT の項である Relatum (= z) が最下位の個体項となる。



y に注目すると、この項は DO の第 2 項 (Patiens) および LOC の第 1 項 (Lokatum) として現れるが、LOC の第 1 項としては、ひとつ上の節点 t の配下に z を持つため z を L 統御するものの、DO の第 2 項としては、ひとつ上の節点 <e,t> の配下に z を持たず、そのさらに上の節点はタイプが異なることから、z を L 統御していない。したがって、y は階層外項である。

階層外項は他の項に対して上位でも下位でもないものとして振る舞うため、y すなわち Patiens/Lokatum が N1 に対応しても、属格項の Relatum 解釈は制約されない。

(56) die Containerbeladung des Schiffes



ゆえに、属格項を伴う適用動詞の名詞化複合語では、N1 が Patiens/Lokatum、属格項が Relatum に対応し得るのである。

5. おわりに

ドイツ語における名詞化複合語の項の解釈については、すでに Rapp (2001) が、N1 が属格項に対し意味的階層関係における下位の項として解釈されるという一般化を行っていたが、この一般化は、間接的使役事象を表す作用動詞や、適用動詞の振る舞いを巡って課題を抱えていた。そこで本稿では、意味形式の構造表示において最下位の個体項を L 統御しない位置にある項を「階層外項」と規定することによって問題の解消を図った。階層外項は項の意味論的階層関係から独立のものとして振る舞う。作用動詞の Stimulus と適用動詞の Patiens/Lokatum はともに、意味形式の構造表示において、最下位の個体項を L 統御し得ない原因事象の深部にある階層外項であり、作用動詞や適用動詞の複合語において N1 として実現されても、その階層的独立性ゆえに、属格項の解釈を制約しないのである。

参考文献

- Brinkmann, Ursula (1997): *The Locative Alternation in German: Its Structure and Acquisition*. Amsterdam: John Benjamins.
- Ehrich, Veronika & Irene Rapp (2000): Sortale Bedeutung und Argumentstruktur: *ung*-Nominalisierungen im Deutschen. In: *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 19 (2). 245–303.
- Fanselow, Gisbert (1988a): Word Formation and the Human Conceptual System. In: *Linguistische Studien, Reihe A* 179. 31–52.
- Fanselow, Gisbert (1988b): Word Syntax and Semantic Principles. In Booij Geert & van Marle Jaap (eds.), *Yearbook of Morphology 1988*, Dordrecht: Foris. 95–122.
- Jackendoff, Ray (1990): *Semantic Structures*. Cambridge/Mass.: MIT Press.
- Kobayashi, Taishi (2017): Zur fehlenden Objekt-Lesart von Genitivkomplementen bei Nominalisierungen im Deutschen — mit besonderer Berücksichtigung der primären und sekundären Kasuszuweisung. In Shin Tanaka et al. (eds.), *Grammatische Funktionen aus Sicht der japanischen und deutschen Germanistik* (LB Sonderhefte 24), Hamburg: Buske. 271–289.
- Lohnstein, Horst (1996): *Formale Semantik und Natürliche Sprache: Einführendes Lehrbuch*. Opladen: Springer.

- Pesetsky, David (1995): *Zero syntax: experiencers and cascades*. Cambridge/Mass.; London: MIT Press.
- Rapp, Irene (1997): *Partizipien und semantische Struktur: zu passivischen Konstruktionen mit dem 3. Status*. Tübingen: Stauffenburg.
- Rapp, Irene (2001): Argumentstruktur und Erstgliedinterpretation bei deverbalen Derivaten — ein semantikbasierter Ansatz. In: *Folia Linguistica* 35 (3–4). 243–284.
- Rapp, Irene (2006): „Was den Besuch zum Ereignis macht“ — eine outputorientierte Analyse für die Verb-Nomen-Konversion im Deutschen. In: *Linguistische Berichte* 208. 407–437.
- Rappaport, Malka & Beth Levin (1988): What to do with θ -roles. In Wendy Wilkins (ed.), *Syntax and Semantics 21: Thematic relations*, New York: Academic Press. 7–36.
- Rivet, Anne (1999): Rektionskomposita und Inkorporationstheorie. In: *Linguistische Berichte* 179. 307–342.
- Voorst, Jan van (1992): The Aspectual Semantics of Psychological Verbs. In: *Linguistics and Philosophy* 15 (1). 65–92.
- Wunderlich, Dieter (1992): *CAUSE and the Structure of Verbs* (= Theorie des Lexikons. SFB 282 Nr. 36). Düsseldorf: Universität Düsseldorf.
- Wunderlich, Dieter (1997a): CAUSE and the Structure of Verbs. In: *Linguistic Inquiry* 28 (1). 27–68.
- Wunderlich, Dieter (1997b): Argument Extension by Lexical Adjunction. In: *Journal of Semantics* 14 (2). 95–142.
- Wunderlich, Dieter (2000): Predicate composition and argument extension as general options — a study in the interface of semantic and conceptual structure. In: Barbara Stiebels & Dieter Wunderlich (eds.), *Lexicon in Focus*, Berlin: Akademie. 247–210.
- 藤縄康弘 (2010): 意味構造と項構造—基本関数の認定とその複合をめぐる一—. In: 成田節・藤縄康弘 [編] 『文意味構造の新展開—ドイツ語学への、そしてその先への今日的展望—』 (日本独文学会研究叢書 073). 日本独文学会. 4-24.
- 藤縄康弘 (2016): 言語的空間把握の日独比較—場所表現の品詞的範疇を軸に一—. In: 宮下博幸 [編] 『ドイツ語と日本語に現れる空間把握 認知と類型の関係を問う』 (日本独文学会研究叢書112). 日本独文学会. 5-19.